

I 2021年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2021年度大学評価結果総評】(参考)

江戸東京研究センターは、国際日本学研究所とエコ地域デザイン研究センターを基盤として作られ、2017年度末に文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」の採択を受けて活動を展開してきたものであり、2021年度には当初の支援期間の最終年度を迎える。そのとりまとめ前年度にあたる2020年度は、Covid-19の影響下にあっても2回の国際シンポジウム、6件の国内シンポジウム、研究会、公開講座の実施、多数の著書、論文、学会発表などの成果を着実に上げることができた。また、成果に対する書評やメディア出演、一般雑誌の掲載に見られるように、広く社会に本事業の重要性のアピールも行われており、高く評価できる。

さらに2回の国際シンポジウムを同時通訳を伴ってオンラインで開催できたことは、オンラインの強みをいかした学際的かつ国際的な学術交流の深化とその成果の発信という点で特筆に値する。

2021年度は5年間の研究活動の成果をとりまとめて広く公表する年と位置付けられており、2回のシンポジウムの実施や特別展の開催が予定されている。さらに新たなテーマによる大型研究費の申請も予定されていることから、法政大学として同センターをどう位置付けていくのかの整理も2021年度の重要な課題であり、大学との協議を尽くし、一層の対外的発信を進める上での軸としていただきたい。

【2021年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

上記2021年度の総評にある2回のシンポジウムの実施、法政ミュージアムの特別展をいずれも9月に開催することでできた。5年間の研究活動の成果をとりまとめて広く公表することに成功し、参加者や入場者数を見ても社会からの期待をおおいに感じることができる年度となった。2022年度においても大学からセンターの継続が認められ、これまでの成果を踏まえて、共同研究をさらに高度に推進するためのプロジェクトテーマを新たに設定していきたい。

また、2021年度中に学際的な共同研究を前面に打ち出した大型研究費・科学研究費補助金基盤研究(S)の申請を行ったものの不採択であった。一方、鹿島学術振興財団の国際共同研究には採択され、さらに人文社会系を中心とした文部科学省の大型研究費支援に申請し、2022年5月現在結果を待っている。

加えて、上記総評で指摘している「法政大学として同センターをどう位置付けていくのかの整理も2021年度の重要な課題」に対しては、前進が見られなかった。法政大学として、江戸東京研究センターを大学の「教育研究ブランディング」であると位置づけ、それを社会に広く標榜した以上、大学が当センターの位置づけをどのように考えているのか、組織の存続をいかなる方法で解決していくべきなのかを今後も継続して考えていきたい。

【2021年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

江戸東京研究センターでは、2021年度は5年間の文部科学省の私立大学研究ブランディング事業最終年度にあたり、2回のシンポジウムと法政ミュージアムの特別展を行い、研究活動の成果取りまとめとしてふさわしい活動がなされたと評価できる。鹿島学術振興財団の国際共同研究が採択され、2022年以降の研究活動の財源が確保されたと言えよう。科研費基盤研究(S)の不採択は残念であるが、申請内容の改善を行いつつ粘り強く継続的に申請を行い続けることが研究費獲得の鍵であり、今後を期待したい。

研究費が獲得され、充実した研究成果が得られれば、それを発信することが自動的に大学の教育研究ブランディングとなり、むしろ、江戸東京研究センターが法政大学の看板となって、それ自身が大学における位置づけとなる可能性を秘めている。今後の研究の発展に多いに期待したい。

II 自己点検・評価

1 理念・目的

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、研究所(センター)の目的を適切に設定しているか。

1.1①研究所(センター)として目指すべき方向性等を明らかにした理念・目的が設定されていますか。2018年度1.1①に対応

はい

※理念・目的の概要を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた。B:改善することができなかった。」を意味する。

江戸東京に蓄積され現在にも生きる固有の自然・歴史・文化・人的資源の発掘と再評価を通じて、この都市が文化的・空間的に持続している理由を解明し、そこから持続可能な地球社会を構築するための方法と理論とを導き出す。その知見を地球社会の諸課題を解決する（実践知）として育み広める教育研究拠点「江戸東京研究センター」を設立し、日本文化の国際的発信者としての法政大学のブランドイメージを確立し展開する。

1.1②理念・目的の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。2018年度1.1②に対応

※検証を行う組織（各種委員会等）や検証の時期等、具体的な検証プロセスを記入。

研究員全員が参加する月に一度の運営委員会で自己点検を行うと同時に、年に一度夏の学内および学外有識者から理念・目的の適切性について検証を受けている。

1.2 研究所（センター）の目的を学則又はこれに準ずる規則等に適切に明示し、教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。

1.2①研究所（センター）の理念・目的を教職員及び学生に周知し、社会に対して公表していますか。2018年度1.2①に対応

はい

（2）長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

持続可能な地球規模でのあるべき社会の構築を目指すには、一つの対象を歴史や美術の社会的な観点と建築や地理の空間的観点の両面から立体的かつ総合的に解明していくことが強く求められている。文系の国際日本学研究所と理系のエコ地域デザイン研究センターが共同して設立された当センターの特色を生かすことで、それを実現できる可能性を示すことが特筆すべき長所といえる。

（3）課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

シンポジウムや研究会で文系と理系の双方からの報告を受け、それに対して様々な意見が出されるものの、研究の段階から両者が一体となって進められることはまだ少ない。そもそもこの二つは焦点や方法が異なることから文理“融合”自体を目指すことに無理があり、一つの対象を“複眼”的な観点から解読するという姿勢が正しい。そうした課題や問題点を新たなテーマ設定を行うことで当センターならではの研究の推進を図りたい。

【理念・目的の評価】

江戸東京研究センターが江戸東京の歴史・文化の研究を深めることは、2021年にオリンピックが開催されたことで東京についての世界的関心が高まり、またポストコロナの時代に入り、インバウンド観光客の復活も期待される中においては時宜にかなったものと言える。文理の枠を超えた学際的研究を行う江戸東京研究センターは特色あるユニークな存在であり、日本文化の国際的発信者としての方向性は適切であり、また、学術面の貢献も大きい。今後のさらなる活動が期待される。

課題として認識されているように、学際的研究の推進は容易ではないが、江戸東京研究センターの特色を生かした研究課題の発掘に尽力されたい。

2 内部質保証

（1）点検・評価項目における現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

2.1①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。2018年度2.1①に対応

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

はい

【2021年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

- ・ 研究員全員による月に一度の運営委員会での質保証に関する意見収集
- ・ 学内委員による質保証に関する提言と意見交換、改善
- ・ 学外委員からの質保証に関する提言と意見交換、改善

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

とりわけ、学内と学外の質保証委員からの指摘は重要であり、それを率直に生かすことが長所・特色となっている。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

2020年度をもって学内の質保証委員を解散したので、それを再開する方法を探りたい。学外の質保証委員会は継続している。

【内部質保証の評価】

江戸東京研究センターでは、研究員全員による月1回の運営委員会での質保証に関する意見収集のほか、学内および学外委員による質保証に関する提言や意見交換を行うなど、質保証に関して適切に活動が行われているが、特に学外委員からの質保証に関する提言と意見交換は、客観的判断を担保するという点で評価したい。

2020年を以て学内の質保証委員を解散しているが、早期の再開に向けた検討を期待したい。

3 研究活動**(1) 点検・評価項目における現状**

3.1 研究所（センター）の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

3.1①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）2021年度1.1①に対応

※2021年度に研究所（センター）として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

法政大学江戸東京研究センターは、2017年度末に文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」の採択を受けてから積極的な活動を続けてきた。5つのプロジェクトを柱に、持続可能な地球社会の実現に向け、近代のパラダイムを超えた都市の未来を考えるための新・江戸東京研究を法政大学のブランドとして位置づけ、成果を発信し、社会においてその認知を推し進めることに、この5年間でほぼ成功したと言ってもいいだろう。国内外の大学や研究機関、また行政、市民とも連携しつつ、多様なネットワークを生かした研究、発信、貢献が着実に成し遂げられてきた。

そうしたなか、2021年度はコロナ禍にあっても、数々のシンポジウムや研究会、イベントを開催し、著書の刊行、論文の発表などを実施して、昨年度と変わらず継続的に当センターの役割を社会に訴え、また新たな江戸東京研究の創出に向けて研究員一同、勢威努力を続けることができた。とりわけ、2021年度は5年間の成果を社会に広く発信することを目的として、HOSEI ミュージアム特別展「江戸東京研究センター「〈人・場所・物語〉——”Intangible”」なもので継承する江戸東京のアイデンティティ」(会期：2021年9月7日～10月3日)、ならびに9月19日と9月26日の二週連続にわたってシンポジウム「EToSがつくる新・江戸東京研究の世界」を開催し、このセンターならではの新たな江戸東京研究の可能性を一般の聴講者とともに、所属する研究員ら全員で探求する指標のすべてを達成することができた。

また、年間を通して実施したプロジェクトは以下の通りである。

①水都一基層構造

プロジェクト・リーダー：高村雅彦（デザイン工学部建築学科教授）

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

研究テーマ：都市と地域のテリトリーと文化的景観

②江戸東京の「ユニークさ」

プロジェクト・リーダー：小林ふみ子（文学部日本文学科教授）

研究テーマ：「江戸東京の生活文化的特性」

③テクノロジーとアート

プロジェクト・リーダー岡村民夫（国際文化学部国際文化学科教授）

研究テーマ：東京のパブリック・アート

④都市東京の近未来研究

プロジェクト・リーダー：山道拓人（デザイン工学部建築学科専任講師）

研究テーマ：国際的研究ネットワークの構築・プロジェクトサイトの策定・行政とまちづくりの連携研究

⑤江戸東京アトラス

プロジェクト・リーダー：福井恒明（デザイン工学部都市環境デザイン工学科教授）

研究テーマ：名所の変遷から江戸東京の基層を探る。

さらに、シンポジウム、研究会の実績についての詳細は以下のとおりである。

開催日、場所、テーマ、参加人数の順に記述する。

- 1 2021/5/21 オンライン (Zoom)
第12回外濠市民塾オンラインレクチャー「濠」で囲まれた日本の都市・・・“外濠”の原景を探る 89名
- 2 2021/7/17 オンライン (Zoom)
シンポジウム「都市の表象文化・アニメ・特撮における東京」99名
- 3 2021/7/21 オンライン (Zoom)
第13回外濠市民塾オンラインレクチャー「外濠150年—未完の都市計画公園としての外濠変遷—」56名
- 4 2021/7/31 オンライン (Zoom)
研究会「東京と今和次郎—「動き」としての惑星都市論—」56名
- 5 2021/8/4 オンライン (Zoom)
江戸東京アトラスプロジェクト シンポジウム「異域から国土へ」42名
- 6 2021/8/28 オンライン (Zoom)
シンポジウム「玉川をめぐる名水と歴史と景観」97名
- 7 2021/9/7-10/3 SiteA：九段北校舎1階, SiteB：BT14階, SiteC：BT26階, SiteD：外濠校舎6階
HOSEI ミュージアム特別展「人・場所・物語—“Intangible”なもので継承する江戸東京のアイデンティティ」652名
- 8 2021/9/19 スカイホール
シンポジウム「EToSがつくる新・江戸東京研究の世界」81名
- 9 2021/9/26 スカイホール
シンポジウム「EToSがつくる新・江戸東京研究の世界」104名
- 10 2021/10/23 市ヶ谷田町校舎スタジオ HAL
江戸東京アトラス・ワークショップ 30名
- 11 2021/10/27 オンライン (Zoom)
第14回外濠市民塾オンラインレクチャー「タイムトリップ・江戸から東京へ—千代田と江戸城外堀の風景—」48名
- 12 2021/11/23 S205教室 (オンライン併用)
シンポジウム「落語がつくる「江戸東京」イメージ」68名
- 13 2022/2/28 S205教室 (オンライン併用)
シンポジウム「東アジア近世・近代都市空間のなかの女性」74名
- 14 2022/3/11 S205教室 (オンライン併用)
シンポジウム「大正・昭和の吉原遊廓」130名

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

- ・江戸東京研究センター「江戸東京研究センター 2020 年度報告書 vol.5」
https://edotokyo.hosei.ac.jp/research/evaluation/progress_report
- ・江戸東京研究センターweb サイト
<https://edotokyo.hosei.ac.jp/research>
https://edotokyo.hosei.ac.jp/symposium_collegium
<https://edotokyo.hosei.ac.jp/publications/activity>

3.1②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）2021年度1.1②に対応

※2021年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者（当研究所関係者は下線付記）、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者（当研究所関係者は下線付記）、内容等）の詳細を箇条書きで記入。

【EToS 叢書】

・書名：【EToS 叢書 3】『水都としての東京とヴェネツィア—過去の記憶と未来への展望』
 編著：江戸東京研究センター、監修：ローザ・カーロリ、小林ふみ子、陣内秀信、高村雅彦、
 出版社：法政大学出版局、発行年月：2022年1月25日

[序]

二つの水都を比較する意味（陣内秀信）

[イントロダクション]

江戸における水辺の文化（田中優子）

ヴェネツィアと海——コスモポリタンな商業都市（ドナテッラ・カラビ）

[第一部 場所の記憶、水の記憶]

地誌と絵本挿絵のなかの江戸（小林ふみ子）

都市の娯楽と記憶——『むだ砂子』考（マスキオ・パオラ）

水辺の記憶——神田川周辺の失われた水流空間の痕跡（ローザ・カーロリ）

視覚的記憶と水面——ヴェネツィアを見つめた写真家のまなざし（アンジェロ・マッジ）

[第二部 地図学と地理学における水都]

現代に継承された江戸東京の庭園——水系と地形の多様性が生み出すユニークさ（畠山望美）

絵地図における首都東京の風景表象——江戸から明治へ（米家志乃布）

[第三部 建築遺産と未来]

効果をあげないヴェネツィア保全のツール——その理由は？（ジョルジョ・ジャンニガン）

“地域の生態系”の維持や継承——東京の「銭湯」の例（栗生はるか）

ヴェネツィアと東京の比較研究の意義——歴史の継承と保存問題（マテオ・ダリオ・パオルッチ）

[第四部 水都をとりまく環境]

ヴェネツィア——水のテリトリー（フランコ・マンクーゾ）

水に映しみる墨東の変貌（ポール・ウェイリー）

江戸東京の聖地から浮かび上がる都市と環境の領域（高村雅彦）

ラグーナのブドウ・オリーブ栽培——伝統とリキッド・モダニティ（フェデリカ・レティツィア・カヴァッロ／ダヴィデ・マストロヴィト）

[第五部 グローバル都市の住民——経済・文化・ガバナンス]

水都東京の再生プロセスと今後への展望（陣内秀信）

「大都市圏ヴェネツィア」に関する議論における水とウォーターフロント、もしくは欠けている論点（ステファノ・ソリアーニ／アレッサンドロ・カルザヴァーラ）

団地とタワーマンション：周縁と中心、内陸とウォーターフロント——東京圏の集住の起源と現況を概観する（渡辺真理／木下庸子）

[結び]

水都の再発見、回復、レジリエンス（ローザ・カーロリ）

【EToS 報告書】

- ・リーフレット：『コモンズを再生する東京』、編集者：北山恒、発行：江戸東京研究センター、発行年月 2021年3月
 論考編

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

イントロダクション

[論考1]「紐上の都市エレメント」つくるコモنزの再生（北山恒）

[論考2]都市組織から見た東京の商店街（陣内秀信）

[論考3]都市を「線」で考える（大野秀敏）

[論考4]コモنزのマネジメント（織山和久）

[論考5]東京の都市組織を読む（渡辺真理）

実践編

イントロダクション

[実践1]路上空間の活用拠点：地域サロン「アイソメ」（栗生はるか）

[実践2]「紐」としての立地路地：食堂付きアパート（仲俊治・宇野悠里）

[実践3]紐状空間に作る新築の商店街：下北沢線路街 BONUS TRACK（山道拓人・千葉元生・西川日満里）

[実践4]商店街を抱き込む生活圏（法政大学大学院・都市デザインスタジオ 2020）

・報告書名：『東京発掘プロジェクト 水辺編Ⅲ』、監修：高村雅彦，皆川典久，発行：江戸東京研究センター、発行年月：2021年3月

・報告書名：『都市の表象文化・アニメ・特撮における東京』、編集者：岡村民夫，発行：江戸東京研究センター、発行年月：2021年12月

講演記録：「アニメ・特撮における東京表象の意義」岡村民夫

講演記録：「特撮映画の東京—1950～60年代、東宝SF映画を中心に」安智史

講演記録：「ジブリアニメの武蔵野」赤坂憲雄

コメント：「アニメの東京表象と民俗学」山本真鳥

コメント：「自然と人間をダイナミックにとらえる」横山泰子

コメント：「東京のゴジラと江戸の妖怪」岩佐明彦

・図録：特別展『〈人・場所・物語〉-Intangible なもので継承する江戸東京のアイデンティティ』発行：江戸東京研究センター、発行年月：2021年9月

HOSEI ミュージアム館長挨拶

江戸東京研究センター長挨拶

江戸東京研究センター（EToS）とは

EToS 特別展について

Site_A 「〈水都〉江戸東京」

Site_B 「水辺の営み・都市の記憶と物語」

Site_C 「現代の東京に息づく〈江戸東京〉」

Site_D 「コモنزを再生する東京 2021」

あとがき

【EToS 協力】

・雑誌「東京人」2021年12月号特集「商店街に新風」、出版社：都市出版株式会社、発行年月：2021年12月

「コモنز再生の最前線」北山恒

「深川資料館通り商店街」陣内秀信

「線状空地」山道拓人

「鼎談 新しい仕掛けをどうつくっていくか」栗生はるか

「紐マップ」北山恒，山道拓人（制作指揮）

【著書】

・書名：『Bulletin286 2021 冬号』

著者名：栗生はるか（P.6-7 寄稿）

標題：都市の記憶から創造する

発行：公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部

発行年月：2020年12月

・書名：『景観用語事典増補改訂第二版』

著者名：篠原修編，福井恒明

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

発行：彰国社
 発行年月：2021年2月
 ・書名：『土地の記憶から読み解く早稲田』
 著者名：ローザ・カーロリ
 発行：勉誠出版
 発行年月：2021年3月
 ・書名：『steam dreams-The Japanese public bath』
 著者名：栗生はるか (P. 14-18 寄稿)
 標題：the preservation of Sento, an urban communication hub
 発行：国際交流基金 シドニー
 発行年月：2021年3月
 ・書名：『東アジアに共有される文学世界 東アジアの文学圏』
 著者名：小峯和明〔編〕 小林ふみ子ら 40名執筆
 標題：東アジアの地図を読むー19世紀大坂商人の東アジア
 発行：文学通信
 発行年月：2021年3月
 ・書名：『最後の文人 石川淳の世界』
 著者名：田中優子 小林ふみ子 帆苺基生 山口俊雄 鈴木貞美
 標題：「第2章 石川淳の〈江戸〉をどう見るか」
 発行：集英社
 発行年月：2021年4月
 ・書名：『近世蝦夷地の地域情報 - 日本北方地図史再考』
 著者名：米家志乃布
 発行：法政大学出版局
 発行年月：2021年5月
 ・書名：『都市のルネサンス-イタリア社会の底力』
 著者名：陣内秀信
 発行：古小烏舎
 発行年月：2021年7月
 ・書名：『禍いの日本大衆文化』
 著者名：小松和彦, 横山泰子
 標題：第7章 岡本綺堂と疫病
 発行：KADOKAWA
 発行年月：2021年7月
 ・書名：『住まいから問うシェアの未来: 所有しえないもののシェアが、社会を変える』
 著者名：岡部明子, 鈴木亮平, 山道拓人, 猪熊純, 前田昌弘, 門脇耕三, 小川さやか
 発行：学芸出版
 発行年月：2021年8月1日
 ・書名：『墨水四時雑詠』
 著者名：停雲会 (小林ふみ子・佐藤温・杉下元明・日原傳・堀口育男)
 標題：田崎草雲隅田川図解説、夕陽楼主人序、生方鼎齋題辞、第11・17・23首注解
 発行：太平書屋
 発行年月：2021年9月
 ・書名：『地域をデザインする Vol.1』
 著者名：陣内秀信 (分担執筆) 日本建築美術工芸協会編
 標題：豊かな生活空間、美しい景観を生み出すために
 発行：建築画報社
 発行年月：2021年10月

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

・書名：『遊廓と日本人』

著者名：田中優子

出版社：講談社

発行年月：2021年10月

・書名：建築ジャーナル No. 1323 「銭湯のある風景」

著者名：栗生はるか（寄稿）

標題：銭湯とまちの関係性

発行：建築ジャーナル

発行年月：2021年11月1日

・書名：『a+u』2021年11月臨時増刊号“Infraordinary Tokyo: The Right to the City”

著者名：栗生はるか（寄稿）

標題：地域の生態系を維持する銭湯

発行：新建築社

発行年月：2021年11月8日

【査読付論文】

・論文標題：明治初期に始まる東京旧武家屋敷の牧場転用による都市空間の変容について—飯田町・番町への牧場移転集中を例として—

著者名：金谷匡高

雑誌名：日本建築学会計画系論文集

発行年月：2021年3月

・論文標題：近現代横浜・神戸における移民の多様性—その類似点と相違点

著者名：大石高志・曾士才

雑誌名：社会経済史学 Vol. 87, No. 2

発行年月：2021年8月

・論文標題：『蘇聯工人住宅区設計』の北京紡績第二工場に対する影響—中国第一次五カ年計画期の労働者住宅地計画に関する研究

著者名：邵帥、高村雅彦

雑誌名：日本建築学会計画系論文集 第86巻 第787号, 2378-2387

発行年月：2021年9月

【論文】

・論文標題：桑名屋徳蔵の人物像

著者名：横山泰子

雑誌名：『小金井論集』15号

発行年月：2020年3月

・論文標題：サルデーニャで出会った水の聖地

著者名：陣内秀信

雑誌名：NICHE 07(工学院大学建築学部)

発行年月：2020年12月

・論文標題：戦前期東京都における史蹟の分布とその特徴

著者名：米家志乃布

雑誌名：法政大学地理学会70周年記念論文集

発行年月：2021年2月

・論文標題：水辺のソーシャルデザインとその未来

著者名：陣内秀信

雑誌名：河川 No. 896

発行年月：2021年3月

・論文標題：岩手とイーハトーブ

著者名：岡村民夫

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

- 雑誌名：『宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報』
 発行年月：2021年5月31日
 ・論文標題：『宮沢賢治 愁いの王』論
 著者名：岡村民夫
- 雑誌名：賢治学+ 第1集
 発行年月：2021年6月
 ・論文標題：希望としての大学
 著者名：田中優子
- 雑誌名：季刊教育法 209号
 発行年月：2021年6月
 ・論文標題：江戸時代に数学が盛んになった四つの理由
 著者名：田中優子
- 雑誌名：現代思想
 発行年月：2021年7月
 ・論文標題：ポストコロナ時代の大学を考える
 著者名：田中優子
- 雑誌名：大学時報 400号
 発行年月：2021年9月
 ・論文標題：水害被災地における市街化の経緯と要因—千曲市の農地転用に着目して—
 著者名：渡邊真由，福井恒明
- 雑誌名：第64回土木計画学研究・講演集（CD-ROM）
 発行年月：2021年12月
 ・論文標題：最上川舟運と河川工学的特性の関係
 著者名：堀越義人，福井恒明
- 雑誌名：景観・デザイン研究講演集 17
 発行年月：2021年12月
 ・論文標題：明治以降戦前の名所案内本にみる東京の神社に対する関心の変遷
 著者名：志村遥奈，福井恒明
- 雑誌名：景観・デザイン研究講演集 17
 発行年月：2021年12月
 ・論文標題：千代田区を対象とした橋詰空間の変遷
 著者名：藤田景，福井恒明
- 雑誌名：景観・デザイン研究講演集 17
 発行年月：2021年12月
 ・論文標題：江戸・明治期の越後平野西部テリトリーオに関する研究
 著者名：齋藤浩志郎，福井恒明
- 雑誌名：景観・デザイン研究講演集 17
 発行年月：2021年12月
 ・論文標題：水害被災地における市街地拡大過程—千曲市杭瀬下地区を対象に—
 著者名：萩原隆太，福井恒明
- 雑誌名：景観・デザイン研究講演集 17
 発行年月：2021年12月
 ・論文標題：『名所江戸百景』に描かれた江戸の周縁領域
 著者名：相澤航平，福井恒明
- 雑誌名：景観・デザイン研究講演集 17
 発行年月：2021年12月
 【学会発表（招待講演・国際学会）】
 ・発表標題：イタリアが生んだ都市とテリトリーオを読み解く方法の日本への応用

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

発表者名：陣内秀信

学会等名：異文化から何を学ぶか？/19・20世紀のイタリアと日本の交流から考える

発表場所：鹿児島大学（オンライン）

発表年月：2021年2月

・発表標題：地中海地域と西アジアとの比較都市論—空間人類学の視点から

発表者名：陣内秀信

学会等名：（科研研究会）都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究

発表場所：オンライン

発表年月：2021年3月15日

・発表標題：文京区本郷における銭湯・旅館・喫茶店等での具体的な取り組みについて

発表者名：栗生はるか、三文字昌也

学会等名：デジタルアーカイブ学会

発表場所：オンライン

発表年月：2021年4月

・発表標題：都市と人間—水辺のコスモロジー

発表者名：陣内秀信

学会等名：世界運河会議

発表場所：名古屋市中京テレビ・ホール

発表年月：2021年5月21日

・発表標題：Reading the Urban Landscape of Tokyo: Topography and History

発表者名：Hidenobu Jinnai

学会等名：DOCOMOMO 国際学生ワークショップ

発表場所：東京（オンライン）

発表年月：2021年7月28日

・発表標題：An antiquarian society: Interest in 'ordinary' old artefacts as a complement to traditional court scholarship

発表者名：Fumiko Kobayashi

学会等名：16th International Conference of the European Association for Japanese Studies

発表場所：Online (hosted in Ghent)

発表年月：2021年8月

・発表標題：近代期の東京における搾乳業と都市空間

発表者名：金谷匡高

学会等名：東アジア都市史学会

発表場所：オンライン

発表年月：2021年9月

・発表標題：テリトリーオの営みが生んだ景観—その再評価と継承の方法—

発表者名：陣内秀信

学会等名：飯田市地域史研究集会

発表場所：オンライン

発表年月：2021年9月11日

・発表標題：Japanese Architects` Devising of Healthy Housing in Manchuria

発表者名：BAO Muping, TAKAMURA Masahiko

学会等名：4th International Conference of the East-Asian Society for Urban History

発表場所：オンライン

発表年月：2021年9月11日

・発表標題：Learning from architecture

発表者名：栗生はるか 他多数

学会等名：日本建築学会建築文化事業委員会

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

発表場所：オンライン

発表年月：2021年10月

・発表標題：Nuove tendenze nella ricerca sulla storia urbana in Giappone

発表者名：Hidenobu Jinnai

学会等名：Aisu International

発表場所：オンライン

発表年月：2021年11月20日

・発表標題：Philosophie

発表者名：Shin Abiko

学会等名：Les concepts en traduction japonaise

発表場所：Paris Nanterre Université

発表年月：2021年11月25日

【学会発表】

・発表標題：江戸川乱歩邸の空間変遷と暮らし-江戸川乱歩邸の実測調査報告 その1-

発表者名：石樽督和、金谷匡高、砂川晴彦

学会等名：日本建築学会近畿支部研究発表会

発表場所：オンライン

発表年月：2021年6月

・発表標題：江戸川乱歩が構想・増築した洋館・玄関廻りについて-江戸川乱歩邸の実測調査報告 その2-

発表者名：金谷匡高、石樽督和、砂川晴彦

学会等名：日本建築学会近畿支部研究発表会

発表場所：オンライン

発表年月：2021年6月

【作品】

・作品名：押上のビル PLAT295

設計者名：ツバメアーキテクト

雑誌名：新建築

発表日：2021年2月号

・作品名：リノア北赤羽

設計者名：ツバメアーキテクト

雑誌名：新建築

発表日：2021年2月号

・作品名：銭湯山車

著者名：文京建築会ユース+銭湯山車巡行部（栗生はるか、三文字昌也、内海皓平、村田勇氣）

賞・媒体名：国際芸術祭「東京ビエンナーレ 2020/2021」出展作品

掲載媒体：東京新聞 他”

発表日：2021年7月

・作品名：奈良井宿 古民家群活用プロジェクト

設計者名：ツバメアーキテクト(上原屋)

雑誌名：新建築

発表日：2021年12月

【その他】

・対談：インフォーマルな場のつくり方

話者：祐成保志（東京大学）、山道拓人・千葉元生・西川日満里（ツバメアーキテクト）

雑誌名：新建築

発表日：2021年2月号

・標題：パブリックトイレをまちに繋げる仕掛け：パブリックトイレのあり方を考える

話者：山道拓人、小泉秀樹（東京大学）、中川エリカ（建築家）

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

雑誌名：新建築

発表日：2021年4月号

・ 標題：文学、農業、宗教を体系的に論じるために（岡村民夫氏インタビュー）

著者名：岡村民夫、宗近真一郎

雑誌名：『図書新聞』

発行年月：2021年6月19日

・ 標題：北斎が生きた江戸時代

著者名：田中優子

雑誌名：AERA ムック

発行年月：2021年7月

・ 標題：シンポジウム「つながる喜び：江戸のリモート・コミュニケーション」報告

著者名：神楽岡 幼子, グラムリヒ=オカ ベティーナ, 辻村 尚子, 菱岡 憲司, 神作 研一, 小林 ふみ子

雑誌名：『近世文芸』114号

発行年月：2021年7月

・ 標題：江戸の夏

著者名：田中優子

雑誌名：サライ

発行年月：2021年8月

・ 標題：明治の寄席芸人・解説

著者名：田中優子

書名：『明治の寄席芸人』（岩波文庫）

発行年月：2021年8月

・ 標題：「北海道江差-北前船の終着地」

著者名：米家志乃布

雑誌名：『地図情報』41-2

発行年月：2021年8月1日

・ 標題：水都・江戸東京のグリーンインフラ

著者名：神谷 博

雑誌名：国づくりと研修 vol.146

発行年月：2021年10月30日

・ 標題：なぜ今銭湯か 銭湯が持つ多様な価値とまちとのつながり（鼎談）

著者名：（鼎談）江口晋太郎、栗生はるか、サム・ホールデン、牧野 徹

雑誌名：建築ジャーナルNo.1323「銭湯のある風景」

発行年月：2021年11月

・ 標題：新しい仕掛けをどうつくっていくか

著者名：（鼎談）小野裕之、栗生はるか、中川寛子

雑誌名：東京人2021年12月号 特集「商店街に新風」

発行年月：2021年11月

【書評】

・ 評者名：栗生はるか

雑誌名：コンフォルト179号

発表年月：2021年6月

対象書籍：写真集『東京銭湯』

・ 評者名：米家志乃布

雑誌名：『都市史研究』8「新刊紹介」

発表年月：2021年8月

対象書籍：安孫子信監修/江戸東京研究センター編『風土（Fudo）から江戸東京へ』法政大学出版局

・ 評者名：岡村民夫

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

| |
|---|
| 雑誌名：『図書新聞』 |
| 発表年月：2021年10月9日 |
| 対象書籍：岡本紀子『立原道造 風景の建築』大阪大学出版会 |
| 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 |
| ・江戸東京研究センター「江戸東京研究センター 2020年度報告書 vol.5」 https://edotokyo.hosei.ac.jp/research/evaluation/progress_report |
| ・江戸東京研究センターwebサイト https://edotokyo.hosei.ac.jp/publications |

3.1③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）2021年度1.1③に対応

| |
|--|
| ※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対する2021年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や2021年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。なお、研究所（センター）に該当するものがない場合は、研究所員によるものを含めることができる。但し、この場合は研究所の研究領域に関するものとする。 |
| 【著作について書かれた書評】 |
| ・評者名：時田紗緒里 |
| 媒体名：国文目白(60) |
| 書評掲載年月：2021年2月 |
| 対象著書（著者）：『好古趣味の歴史 江戸東京からたどる』（法政大学江戸東京センター・小林ふみ子・中丸宣明（編）、文学通信、2020年6月） |
| ・評者名：構大樹 |
| 媒体名：週間読書人 |
| 書評掲載年月：2021年4月2日 |
| 対象著書（著者）：『宮沢賢治論 心象の大地へ』（岡村民夫） |
| ・評者名：澤田勝雄 |
| 媒体名：しんぶん赤旗 |
| 書評掲載年月：2021年4月4日 |
| 対象著書（著者）：『宮沢賢治論 心象の大地へ』（岡村民夫） |
| ・評者名：村上祐紀 |
| 媒体名：日本近代文学104号 |
| 書評掲載年月：2021年5月 |
| 対象著書（著者）：『好古趣味の歴史 江戸東京からたどる』（法政大学江戸東京センター・小林ふみ子・中丸宣明（編）、文学通信、2020年6月） |
| ・評者名：吉田文憲 |
| 媒体名：現代詩手帖 |
| 書評掲載年月：2021年6月 |
| 対象著書（著者）：『宮沢賢治論 心象の大地へ』（岡村民夫） |
| ・評者名：佐藤信 |
| 媒体名：読売新聞 |
| 書評掲載年月：2020年12月6日 |
| 対象著書（著者）：『水都東京—地形と歴史で読み解く下町・山の手・郊外』（筑摩書房、2020） （陣内秀信） |
| ・評者名：佐藤信 |
| 媒体名：読売新聞 |
| 書評掲載年月：2021年7月25日 |
| 対象著書（著者）：『近世蝦夷地の地域情報』（米家志乃布） |
| ・評者名：齋藤忠光 |
| 媒体名：日本地図学会『地図』59-2 |
| 書評掲載年月：2021年8月 |

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

- 対象著書（著者）：『近世蝦夷地の地域情報』（米家志乃布）
 ・評者名：後藤和子
 媒体名：文化経済学 第18巻2号
 書評掲載年月：2021年9月
- 対象著書（著者）：『水都東京一地形と歴史で読みとく下町・山の手・郊外』（陣内秀信）
 ・評者名：佐々木利和
 媒体名：北海道新聞
 書評掲載年月：2021年9月5日
- 対象著書（著者）：『近世蝦夷地の地域情報』（米家志乃布）
 ・評者名：大井実
 媒体名：西日本新聞
 書評掲載年月：2021年9月11日
- 対象著書（著者）：『都市のルネサンス—イタリア社会の底力』（陣内秀信）
 ・評者名：松田法子
 媒体名：都市史研究 8
 書評掲載年月：2021年10月
- 対象著書（著者）：『水都東京一地形と歴史で読みとく下町・山の手・郊外』（陣内秀信）
 ・評者名：藤村龍至
 媒体名：週刊読書人
 書評掲載年月：2021年10月29日
- 対象著書（著者）：『都市のルネサンス—イタリア社会の底力』（陣内秀信）
 ・評者名：小野有五
 媒体名：(財)地図情報センター『地図情報』159
 書評掲載年月：2021年11月
- 対象著書（著者）：『近世蝦夷地の地域情報』（米家志乃布）
 ・評者名：小野田一幸
 媒体名：歴史地理学会『歴史地理学』64-4
 書評掲載年月：2021年11月20日
- 対象著書（著者）：『近世蝦夷地の地域情報』（米家志乃布）
 ・評者名：宮田純
 媒体名：図書新聞第3525号
 書評掲載年月：2022年1月1日
- 対象著書（著者）：『近世蝦夷地の地域情報』（米家志乃布）
 ・評者名：上杉和央
 媒体名：人文地理学会『人文地理』74-1
 書評掲載年月：2022年3月31日
- 対象著書（著者）：『近世蝦夷地の地域情報』（米家志乃布）

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- 江戸東京研究センター「江戸東京研究センター 2020年度報告書 vol.5」
https://edotokyo.hosei.ac.jp/research/evaluation/progress_report
- 江戸東京研究センターwebサイト
<https://edotokyo.hosei.ac.jp/publications>

3.1④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）2021年度1.1④に対応

※2021年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

参考として、まず2020年度文部科学省による「私立大学研究ブランディング事業」の当センターに対する総括についてその全文を転載する。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

「(優れている点)

- ・法政大学の立地と研究蓄積にふさわしい事業であり、推進された4つのプロジェクトのそれぞれにおいて今後につながる研究成果が得られている。
- ・江戸東京研究センターの設立は、これまでの研究の蓄積を継承しつつ情報発信を行うためのブランド戦略として非常に有効である。また、当該センターを中心に全学をあげて国際的な発信及び交流の促進を行っており、大きな成果が期待される。
- ・センターの研究成果を出版するだけでなく、概要がウェブサイトにも的確にまとめられており、情報発信に工夫がみられる。
- ・研究成果の量、質、ブランディングのインパクトなど、総合的に高く評価でき、ブランディング事業の嚆矢とも言うべき取り組みである。

(改善を要する点)

- ・江戸東京センターは少なくとも2021年度までは存続させるとあるが、同年度を大きな取りまとめの年とするとしても、同年度以降も存続させていくことが望まれる。」

以上のように、法政大学として、江戸東京研究センターを大学の研究ブランディングであると社会に広く標榜した以上、大学が当センターの位置づけをどのように考えているのか、またそれを安定的なものとするようこちらからも要望していくことで解決を図りたい。

次に外部評価委員評価を以下に記載する。

2021年6月18日のコロナ禍の影響を受けZoom開催となった委員会では、3名の委員から、実施計画の適切性、事後評価及び検証、総合評価のすべてにおいて高い評価を受けた。とくに、江戸東京研究センター2020年度報告書(江戸東京研究センター vol. 4)、ブランディング事業(2017～2019年度)に対する文部科学省総括、文部科学省に提出した事業成果報告書、「水都江戸の基層—中世武蔵国絵図」、書籍「好古趣味の歴史」、報告書「パブリックアートと東京」、報告書「東京発掘プロジェクト 水辺編Ⅲ」、シンポジウム資料「コモンズを再生する東京」についてはあらかじめ資料を送付し、いずれも高い評価を得た。

2021年度の活動内容についての外部評価は2022年6月頃に開催する予定である。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

特になし

3.1⑤科研費及びその他外部資金の応募・獲得状況 2021年度1.1⑤に対応

※2021年度中に研究所(センター)として応募した科研費等外部資金及び2021年度中に採択を受けた科研費等外部資金について、研究担当者(代表・分担の別)、研究種目、事業名、実施年度、交付金額の詳細を箇条書きで記入。

1. 2021年度中に応募した研究費30件

(1) 研究代表者6件

- ・米家志乃布 基盤研究(C) 近代日本のアートと地理空間—メディア表象とパブリックアート体験にみる都市と地方 3年間総額4,992千円
- ・田中優子 基盤研究(S) 文理複眼への転換を方法とする新・江戸東京研究 5年間総額150,580千円
- ・福井 恒明 基盤研究(A) テリトリーオによるエコ地域デザイン 5年間総額47,620千円
- ・金谷 匡高 基盤研究(B) 世田谷区における近代建築の再評価に基づく地域形成史の多様性に関する研究 4年間総額9,541千円
- ・岩佐 明彦 基盤研究(C) 災害時居住環境におけるクロスオーバーモデルの構築 3年間総額4,980千円
- ・高村雅彦, 鹿島学術振興財団国際共同研究, Edo Castle Mission—日伊国際共同研究による江戸城CG復元プロジェクト 2年間総額10,000千円

(2) 研究分担者24件

- ・小林ふみ子 基盤研究(S) 文理複眼への転換を方法とする新・江戸東京研究
- ・小林ふみ子 基盤研究(C) 近世後期の好古・考証研究の源流と展開に関する学際的国際共同研究
- ・小林ふみ子 基盤研究(C) 江戸時代中・後期 真景表現の受容と展開に関する基礎的研究

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた、B:改善することができなかった。」を意味する。

- ・米家志乃布 基盤研究(S) 文理複眼への転換を方法とする新・江戸東京研究
 - ・米家志乃布 基盤研究(B) 古文献解読・遺址調査・GIS分析の融合による前近代中国幹線交通路の環境史学的研究
 - ・横山泰子 挑戦的研究 妖怪絵本を活用した日本語学習者向けのオンデマンド日本文化教育教材の開発
 - ・川久保俊, 学術変革領域研究 (A), 再生可能エネルギー主力化に向けたシナジー・トレードオフ構造の包括的解明
 - ・福井恒明, 基盤研究(S), 文理複眼への転換を方法とする新・江戸東京研究
 - ・山道拓人, 基盤研究(S), 文理複眼への転換を方法とする新・江戸東京研究
 - ・高村雅彦, 基盤研究(S), 文理複眼への転換を方法とする新・江戸東京研究
 - ・陣内秀信, 基盤研究(S), 文理複眼への転換を方法とする新・江戸東京研究
 - ・高村雅彦, 基盤研究(A) (一般), テリトリーオによるエコ地域デザイン
 - ・岩佐明彦, 基盤研究(A) (一般), テリトリーオによるエコ地域デザイン
 - ・高見公雄, 基盤研究(A) (一般), テリトリーオによるエコ地域デザイン
 - ・金谷匡高, 基盤研究(A) (一般), テリトリーオによるエコ地域デザイン
 - ・陣内秀信, 基盤研究(A) (一般), テリトリーオによるエコ地域デザイン
 - ・福井恒明, 基盤研究(B) (一般), 地域水系基盤概念に基づいた水インフラとともにある暮らしの再生デザイン手法の開発
 - ・川久保俊, 基盤研究(B) (一般), 暑熱リスク軽減を目的とした対策導入シナリオの地域特性評価
 - ・川久保俊, 基盤研究(B) (一般), 社会変革シナリオ探索のための社会・自然生態システム統合モデルの開発
 - ・森田喬, 基盤研究(B) (一般), デジタル社会における地図リテラシーの再構築
 - ・陣内秀信, 基盤研究(B) (一般), 持続可能なバリューチェーン構築によるテリトリーオの内発的発展
 - ・陣内秀信, 基盤研究(C) (一般), 食農コモン(ズ)のアントレプレナーシップ:フランスとイタリアの比較から
 - ・陣内秀信, 鹿島学術振興財団国際共同研究, Edo Castle Mission—日伊国際共同研究による江戸城CG復元プロジェクト
 - ・福井恒明, 鹿島学術振興財団国際共同研究, Edo Castle Mission—日伊国際共同研究による江戸城CG復元プロジェクト
2. 2021年度採択を受けて実施した研究費14件
- (1) 研究代表者8件
- ・小口雅史 基盤研究(B) 古代末期防衛的集落の実態解明と、中世移行期日本北方世界を含む北東アジア史の再構築 2019-04-01～2023-03-31 2,300,000円 (19H01297)
 - ・小林ふみ子 基盤研究(C) 江戸狂歌資料による大衆的作者=読者の教養の研究 2020-04-01～2025-03-31 500,000円 (20K00298)
 - ・大塚紀弘 基盤研究(C) 資料調査に基づく日本中世における渡来人の基礎的研究 2019-04-01～2024-03-31 600,000円 (19K01001)
 - ・松本剣志郎 基盤研究(C) 近世都市インフラ維持管理の社会史的研究 2018-04-01～2022-03-31 1,600,000円 (18K04545)
 - ・安孫子信 基盤研究(C) オーギュスト・コント『実証哲学講義』の歴史的意義をめぐる学際的研究 2019-04-01～2022-03-31 3,300,000円 (19K00116)
 - ・山本真鳥 基盤研究(C) オセアニア植民地時代における非白人移住者の歴史人類学的研究 2019-04-01～2023-03-31 1,000,000円 (19K01208)
 - ・高村雅彦, 基盤研究(B), 東アジア都市の住宅地形成と集合住宅に関する学術調査 2017-04-01～2022-03-31 1,800,000円 (17H04597)
 - ・米家志乃布 公益財団法人国土地理協会学術研究助成 千島・樺太の地図出版史 - 日露比較研

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた、B:改善することができなかった。」を意味する。

究 研究期間 2021年9月～2023年3月 交付額 480,000円

(2) 研究分担者 6件

- ・小口雅史 基盤研究(B) 料紙分析の手法による中国古文書学の基盤構築とその応用 2020-0401～2024-03-31 560,000円 (20H01298)
- ・小林ふみ子 基盤研究(C) 高大連携による古典文学の探究型授業の教材作成と教育モデル構築の実践的研究 2019-04-01～2024-03-31 30,000円 (19K00530)
- ・岩佐 明彦, 基盤研究(A), 応急仮設住宅「学」の確立, 2021-04-05～2026-03-31, 630,000円, (21H04583)
- ・川久保 俊, 基盤研究(A), リアルタイム生活情報のAI解析による革新的高齢者ケア改善システムの確立, 2021-04-05～2025-03-31, 300,000円, (21H04846)
- ・陣内 秀信, 基盤研究(B), 地理的表示(GI)を活用したSDGsに寄与する農業と農村振興に関する日欧比較研究, 2019-04-01～2022-03-31, 0円, (19H01544(20))
- ・川久保 俊, 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B)), 都市における暑熱リスク軽減を目的とした対策導入シナリオに関する国際共同研究, 2019-02-07～2022-03-31, 220,000円, (18KK0123)

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・研究開発センターの科研費データ(から抽出・編集作業を行った)
- ・科学研究費データベース「KAKEN」
- ・本研究所所員からの報告Eメール本文

3.1⑥研究所(センター)における研究活動に関して、COVID-19への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。2021年度1.1⑥に対応

※取り組みの概要を記入。

ほぼすべての国際シンポジウムと研究会はZoomを利用したオンラインを併用し、滞りなくスムーズに運営することができた。とくに、国際シンポジウムや研究会ではZoomを最大限に活用したことにより、今後の可能性を新たに認知することができた。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・江戸東京研究センターホームページ「シンポジウム・研究会等報告」
https://edotokyo.hosei.ac.jp/symposium_collegium

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

- ・文系と理系の異分野融合の研究組織であり、かつ研究業績が上がっている点。
- ・学外の研究組織(大学、博物館)や地域、企業などとの連携活動の可能性があり、かつ実際に実績が積み上げられている点。
- ・学内の人的ネットワークを多様に作る点。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画(既に実施している場合にはその進捗状況も含めて)をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

特になし

【研究活動の評価】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた。B:改善することができなかった。」を意味する。

江戸東京研究センターにおける5年間にわたる研究成果は、多数の書籍や論文、研究報告、高い科研費採択率という実績を残し、高く評価できる。それは、文部科学省や外部評価委員からも同様の高評価を得ていることや多数の書評が出されていることから裏付けられる。

COVID-19 感染拡大は残念ではあったが、逆にそれがオンラインによる国際シンポジウムや研究会の可能性を拡大する機会ともなった。2022年度以降もこれまでの成果を継続的に、かつ英語でもより多く発信し続けられれば、江戸東京研究センターひいては大学のブランディングに貢献することになる。そうなれば、文部科学省から指摘されている大学としての江戸東京研究センターの位置づけも自ずと定まってくるのが期待されよう。

4 教育研究等環境

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 教育研究を支援する環境や条件を適切に整備し、教育研究活動の促進を図っているか。

4.1①ティーチング・アシスタント (TA)、リサーチ・アシスタント (RA)、技術スタッフなどを配置することによる、教員の教育研究活動を支援する体制は整備されていますか。2018年度4.1①に対応

【S・A・B】いずれかを選択してください

※教育研究支援体制の概要を記入。

江戸東京研究センターでは、設立当初より R.A. を配置しており、それにより若手研究者の育成と教員の教育研究活動の支援をおこなっている。2021年度は理系から4名、文系から2名、合計6名のR.A.を採用した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- 江戸東京研究センター「江戸東京研究センター 2020年度報告書 vol.5」
https://edotokyo.hosei.ac.jp/research/evaluation/progress_report
- 江戸東京研究センターweb サイト
<https://edotokyo.hosei.ac.jp/publications>

4.1②研究所(センター)として、教育研究環境の整備に関して、COVID-19への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。新規

※取り組みの概要を記入。

教育研究について、いずれの教員や職員、R.A.は研究室や事務室等の既存の環境で活動しているため、大学が定めた個々の状況に準じている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

特になし。

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

特になし。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

設置研であるがゆえに固有のスペースが確保できていない。教育研究環境の整備の基礎的条件としてまずスペースの確保が望まれる。

【教育研究等環境の評価】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

江戸東京研究センターでは、理系から4名、文系から2名のリサーチ・アシスタントを採用し、若手研究者育成の場として機能している。課題として指摘されているように、固有スペースの確保は今後の研究の継続的な発展をするうえで必須である。多額の研究費を獲得しており、大学側にも応分の配慮を求めたい。

5 社会貢献・社会連携

(1) 点検・評価項目における現状

5.1 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか。また教育研究成果等を適切に社会に還元しているか。

5.1①学外組織との連携協力による教育研究の推進に関する取り組み及び社会貢献活動を行っていますか。2018年度5.1①に
対応

S：さらに改善することができた

※取り組み概要を記入。

市ヶ谷地域の大学と高校、企業、商店街、学生とともに活動する外濠市民塾の活動、シンポジウム・研究会の一般公開、法政ミュージアムにおける特別展実施による研究成果の開示、新聞社や出版社との連携による記事の掲載、著書の刊行などに代表されるように、多様な場面での社会への貢献、成果の還元を着実にこなっている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

センター設立から5年間のまとめとして、法政ミュージアムにおける特別展を大々的に実施し、ミュージアム開設以来最多の入場者数を数えたことがS評価の根拠となっている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・図録：特別展『〈人・場所・物語〉-Intangible なもので継承する江戸東京のアイデンティティ』発行：江戸東京研究センター、発行年月：2021年9月

・江戸東京研究センター「江戸東京研究センター 2020年度報告書 vol.5」
https://edotokyo.hosei.ac.jp/research/evaluation/progress_report

・江戸東京研究センターwebサイト

<https://edotokyo.hosei.ac.jp/publications>

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

今後も現状を維持できるようにしたい。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

特になし

【社会貢献・社会連携の評価】

江戸東京研究センターでは、地域社会や近隣の教育機関と連携した外堀市民塾、シンポジウム、法政ミュージアム特別展、新聞記事、著書の刊行など、研究成果の社会への還元をとおして地域社会へ貢献し続けており、高く評価できる。今後も活動の継続・拡大に期待したい。

6 大学運営・財務

(1) 点検・評価項目における現状

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

6.1 方針に基づき、学長をはじめとする所要の職を置き、教授会等の組織を設け、これらの権限等を明示しているか。また、それに基づいた適切な大学運営を行っているか。

6.1①運営委員会等の権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。2018年度6.1①に対応

| |
|---|
| はい |
| ※概要を記入。 江戸東京研究センターは、設置研であるため本学のサステナビリティ実践知研究機構に所属しており、その規程を準用している。 |
| 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・法政大学サステナビリティ実践知研究機構規程（規定第1207号） ・法政大学サステナビリティ実践知研究機構細則（規定第1208号） |

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

| |
|------|
| 内容 |
| 特になし |

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

| |
|------|
| 内容 |
| 特になし |

【大学運営・財務の評価】

| |
|--|
| 江戸東京研究センターでは、法政大学サステナビリティ実践知研究機構に所属し、同機構の規定を準用しており問題はない。 |
|--|

III 2021年度中期目標・年度目標達成状況報告書

| No | 評価基準 | 研究活動 |
|------|-------|--|
| 1 | 中期目標 | 学際的研究教育拠点の形成。 エコ地域デザイン研究センターと国際日本学研究所が共同し、国際化の時代に対応した先端的な江戸東京研究を行い、研究成果を社会に広く還元するとともに、持続可能な地域社会の構築を目指す教育拠点となる。 |
| | 年度目標 | 文部科学省による当初の支援期間の最終年である2021年度は、5年間の研究活動の成果をまとめて広く公表していくことが目標となる。それを受けて、2022年度以降も当センターが継続するための研究のテーマを新たに見出していくことがより大きな目標となる。節目の年にあたるため、研究活動の年度目標と次の社会貢献は密接に連動させ展開することが求められる。 |
| | 達成指標 | 5年間の成果をまとめたシンポジウムを9月に2回開催し、また同時期に法政ミュージアムにて当センターの特別展を実施し、研究活動の内容を広く公表していく。 |
| | 年度末報告 | 執行部による点検・評価 |
| 自己評価 | | S |
| | 理由 | 5年間の成果を社会に広く発信するため、HOSEI ミュージアム特別展・江戸東京研究センター「〈人・場所・物語〉——”Intangible” なもので継承する江戸東京のアイデンティティ」（会期：2021年9月7日～10月3日）、ならびに9月19日と9月26日の二週連続にわたってシンポジウム「EToSがつくる新・江戸東京研究の世界」をオンラインで開催し、 |

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

| | | | |
|--|---|----------------|---|
| | | | EToS 独自の新たな江戸東京研究の可能性を一般の聴講者とともに、所属する研究員ら全員で探求する指標のすべてを達成することができた。 |
| | | 改善策 | 左記シンポジウムの内容を出版する予定である。着実に原稿を集めて 2022 年度内に必ず刊行するよう期待したい。 |
| No | 評価基準 | | 社会連携・社会貢献 |
| 2 | 中期目標 | | 東京の貴重な水辺である外濠・玉川上水をはじめ、東京の地域に対する関心を高め、具体的な環境改善につなげる |
| | 年度目標 | | 公開シンポジウムの開催、ミュージアムへの展示協力、著書の発行、市民との共同プロジェクトを通して、社会貢献・社会連携することが目標となる。 |
| | 達成指標 | | 9 月のシンポジウム開催ならびにミュージアム展示、東京とヴェネツィアの水都に関する著書の日伊同時かつ共同出版の実現、外濠市民塾の開催を達成指標とする。 |
| | 年度末報告 | 教授会執行部による点検・評価 | |
| | | 自己評価 | S |
| 理由 | 上記のシンポジウム開催ならびにミュージアム展示を実現できたことに加えて、EToS 叢書 3 『水都としての東京とヴェネツィア—過去の記憶と未来の展望』（法政大学出版局、2022 年 1 月）、またイタリアの権威あるジャーナルの “Storia Urbana”（2021 年 12 月）に EToS の日本人の発表を中心として英語版を刊行することができた。同時に、現在カ・フォスカリ大学が主体となり、日本人以外の発表を含めたすべての内容を英語版として刊行する準備が進められている。さらに、「第 13 回外濠市民塾オンラインレクチャー：外濠 150 年—未完の都市計画公園としての外濠変遷—」（2021 年 7 月 21 日）を開催し、達成指標のすべてを実現できた。 | | |
| 改善策 | 左記カ・フォスカリ大学から出版予定の著書が確実に刊行されるよう協力していくことが重要である。 | | |
| <p>【重点目標】</p> <p>文部科学省による当初の支援期間の最終年である 2021 年度は、5 年間の研究活動の成果をまとめて広く公表していくことが目標となる。それを受けて、2022 年度以降も当センターが継続するための研究のテーマを新たに見出していくことがより大きな目標となる。</p> <p>【目標を達成するための施策等】</p> <p>5 年間の成果をまとめたシンポジウムを 9 月に 2 回開催し、また同時期に法政ミュージアムにて当センターの特別展を実施することを目標達成のための具体的な施策とする。その結果を受けて、2022 年度以降も当センターが継続するための研究のテーマを新たに見出していくことがより大きな目標となるが、そのためには、大型研究費の申請に加えて、法政大学として江戸東京研究センターを大学の研究ブランディングであると社会に広く標榜した以上、大学が当センターの位置づけをどのように考えているのか、またそれを安定的なものとするようこちらからも要望していくことで解決を図ることが、次年度以降に関わる目標達成のための基本的な施策となる。</p> <p>【年度目標達成状況総括】</p> <p>年度目標のすべてを十分に達成できただけでなく、全体で EToS の研究者が関係する著書 10 冊、報告書 2 冊、特別展カタログ 1 冊、論文 14 本、学会発表 12 件、作品発表 2 件、その他新聞記事や雑誌等で 10 件に上る研究成果を公表した。また、センター存続のために、科学研究費補助金基盤研究 S や文部科学省の先導的人文学・社会科学研究推進事業（学術知共創プログラム）、民間の研究費補助金に応募した。法政大学として江戸東京研究センターを大学の研究ブランディングであると社会に広く標榜した以上、大学が当センターの位置づけをどのように考えているのか、またそれを安定的なものとするようこちらからも要望し、安定的なセンター運営のための解決を図ることが 2022 年度の基本的な施策となる。</p> | | | |

【2021 年度目標の達成状況に関する大学評価】

江戸東京研究センターでは、2021 年度は文部科学省の支援期間の最終年度にあたり、研究成果のとりまとめと発信に重点目標が置かれた。その一環として EToS 叢書 3 『水都としての東京とヴェネツィア—過去の記憶と未来の展望』（法政大学出版局、2022 年 1 月）を刊行し、“Storia Urbana”（2021 年 12 月）に論文を掲載することができた。年度目標はすべて達成でき、最終年度のとりまとめもほぼ完了した。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

IV 2022 年度中期目標・年度目標

| No | 評価基準 | 研究活動 |
|---|------|---|
| 1 | 中期目標 | 国際日本学研究所とエコ地域デザイン研究センターが共同することで、他の研究機関では見られない文理が一体となった研究活動を推進し、国際化の時代に対応した先端的な〈新・江戸東京研究〉を継続して、持続可能な地域社会の構築を目的とする学際的研究教育拠点の確立を目指す。 |
| | 年度目標 | 2021 年度に 5 年間の成果のまとめとして、2021 年 9 月 19 日と 9 月 26 日に二週連続にわたってシンポジウム「EToS がつくる新・江戸東京研究の世界」を開催した。そこでは、当センター独自の新たな江戸東京研究の可能性を所属する研究員ら全員で探求できた。そのシンポジウムの内容を 2022 年度中に刊行する。また、研究の段階から文理が一体となって進められるよう枠組みのあり方やテーマの設定などに方策を練り、江戸東京研究センターならではの活動を実施する。これらの成果や未来への可能性を発信、強調することで法政大学のブランディング形成のために欠かせない組織であることを改めて示し、年度ごとに存続が図られるのではなく、当センターの継続的な設置を大学と協議していく。 |
| | 達成指標 | ①2021 年度シンポジウムに関する著書の刊行、文理が共同で進めるための②枠組み、③テーマの設定。上記三つの達成、実現を指標とする。 |
| No | 評価基準 | 社会連携・社会貢献 |
| 2 | 中期目標 | 持続可能な地域社会の構築を目的とする学際的研究教育拠点の確立の一環として、〈新・江戸東京研究〉の成果を広く公開し、社会と連携してその意義を確認し、そのことが多様な社会に貢献できることを示していく。 |
| | 年度目標 | ①市ヶ谷地域の大学と高校、企業、商店街、学生とともに活動する外濠市民塾の活動、②シンポジウム・研究会の一般公開、③新聞社や出版社との連携による記事の掲載、④著書の刊行など、多様な場面での社会への貢献、成果の還元を継続して着実にこなす。 |
| | 達成指標 | 年度目標の①を 1 回、②を 5 回、③を 3 回、④を 1 回達成することを指標とする。 |
| <p>【重点目標】 当センターの特色を最大限に生かせるよう、研究の段階から文理が一体となって進めることを重点目標とする。また、年度ごとに存続が図られるのではなく、当センターの継続的な設置を大学と協議していきたい。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 研究活動における新たな枠組みのとテーマの設定を目標達成のための施策とする。</p> | | |

【2022 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

江戸東京研究センターにとって 2021 年度に行われたシンポジウムを取りまとめた書籍の刊行は、私立大学研究ブランディング事業の最終とりまとめとして重要な目標である。また、江戸東京研究センターのユニークな特徴である文理が統合された研究枠組みとテーマ設定は今後の江戸東京研究センターの資金獲得の観点からも重要である。

【大学評価総評】

江戸東京研究センターは 2017 年度に文部科学省の私立大学研究ブランディング事業の採択を受け、サステイナビリティ実践知研究機構に設置された研究所である。

2021 年度は同事業の最終年度にあたり、研究成果の取りまとめと発信を積極的に行ってきた。科研費をはじめとする多くの競争的資金を獲得し、多数の論文、書籍を発表し、新聞や書評にも多く取り上げられ、イタリアの大学からの英文書籍の刊行を計画するなど、国際的な活動も展開した。また、COVID-19 の感染拡大を逆に機会ととらえ、オンラインによるシンポジウムや研究会活動を拡大することができた。こうした研究活動や国際的な広がりを持つ情報発信活動は高く評価すべきであり、大学のブランディングを高めている。

私立大学研究ブランディング事業は終了したが、これまでの業績に上積みを図り、江戸東京研究センターのプレゼンスの向上を継続できれば、学術面のみならず大学のブランディング向上にさらに貢献する。そのためには、2022 年度以降の研究枠組みとテーマ設定が急務である。江戸東京研究センターは文系と理系の研究者が共同する仕組みを持っていることがユニークな特徴であるが、その中でどのような研究体制と考え方を構築するかが課題となろう。

今年度は江戸東京研究センターの第 2 フェーズともいえる立ち上げの時期であり、グラウンドデザインを確立すること

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

が期待される。そうすれば、当初よりの課題である大学における江戸東京研究センターの位置づけもおのずと定まってくるものと思われる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。